

令和4年度 学校自己評価システムシート (東邦音楽大学附属東邦第二高等学校)

| | |
|----------|--|
| 目指す学校像 | ・音楽芸術の一貫教育を通じ、情操豊かな人性格の形成を目指す |
| 本年度の重点目標 | 1.新学習指導要領に基づいた、学力の育成と充実を図る(音楽教科・科目及び普通教科の学びを通して、『知識・技能』の習得、『思考力・判断力・表現力等』の育成、『学びに向かう力・人間性等(養育)』→主体的・対話的で深い学びへと繋げる) 2.豊かな人間性の涵養(①各専攻実技を軸とし、他教科・科目の学習を通して豊かな感性を醸成する ②全教育課程を通して、道徳教育を推進し、他者と共によりよく生きていく人間性を涵養する) 3.基本的な生活習慣の確立と充実(社会生活・活動の基本となる挨拶礼法、時間の自己管理等) |

| |
|---|
| 学校関係者評価は、最終評価の学校評価結果欄で、学校自己評価の結果として開示させていただきます。(実施日令和5年3月17日) |
| 学校関係者：4名 |

| 領域 | 年度目標 | | 年度評価 | | |
|---------|---|---|--|---|--|
| | 評価項目 | 現状と課題 | 具体的方策 | 方策の評価指標 | |
| 学 習 指 導 | ○新学習指導要領に基づいた、学力の育成と充実を図る。 ○『知識・技能』の指導では、基礎学力の定着と充実を図る。 ①音楽活動を始め諸活動を推進していく上で、必要不可欠な基礎的な理論と基本的なスキルの習得には個々の生徒の状況を踏まえた指導を行う。 ②教科等横断的な学習を通して思考力・判断力・表現力の育成を図る。特に、新指導要領での新設科目に於いてはその指導目標を理解し、指導計画を確立していく。 ○思考力・判断力・表現力等の育成(対話的で深い学びの実現に向けた授業改善) ①音楽を軸とした各教科・科目の学びを通して豊かな感性の育成を目標とする ②教育課程を通して、道徳教育を推進し他者とともによりよく生きていく人間性を涵養する ○学びに向かい合う力、人間性の涵養(各教科・科目の特性を生かした形で、各授業に於いて『主体的な学び』を推進する) 同時に、各授業での生徒間の学習活動(協働)から積極的な他者を理解し、思いやる姿勢を育成する。 | ・音楽の基礎科目である『楽典』は、入試科目として設定せず入学後基本的な事柄から指導していく事を指導方針としている。しかし、実際、指導をしていく過程で、次第に学力差が顕著になっていく現状が見受けられる。同じく、ソルフェージュに於いても同じような傾向が見える。各専攻実技の基本的な演奏スキル(ソルフェージュ)の学力を如何にして向上させていくかが、大きな課題となる。新学習指導要領の施行に伴い編成した新教育課程の教科・科目の普通科目、音楽科目の指導内容に関して共通理解を図る。 観点別評価に関しては、①知識・技能 ②思考・表現・判断 ③主体的に学習に取り組む態度の中で、③の『主体的に学習に取り組む態度』を評価するにあたって、『粘り強い学習への取り組み』と『自らの学習の調整』をして、その結果、しつかり学習し、成果に結びついたかを評価する各、各教科・科目の特性に合わせて評価していくことを、各担当教員が検討を進めていく事とする。 | ・『楽典・ソルフェージュ・コールユーン・ポング』の学力向上の為に、各指導担当者と、の連携をもとに①生徒が苦手としている要素には何が有るのか、②何が共通している傾向がないかをどうか調べる、③①②の結果として、生徒が効果的に基礎学力を身に着け、さらにその力を充実させていくことを目標に指導を進めていく事とする。 新カリキュラムでは、教科・科目等の横断的な指導が可能な組み立てになっている。 例えば、普通教科の“歴史”“地理”“音楽教科の”音楽史”“鑑賞研究”などは音楽科生徒が“楽典”作曲家を研究するに当たって“その時代的・地理的背景”からの影響などを学ぶことが可能となっている。各教科・科目で、まだまだ様々な可能性を検討していく事とする。 | ・『ソルフェージュ』の学習に於いては、授業時間内、又は、各個人の練習量によって、基礎的な力の養成は認められる者の、生徒の潜在的に持っている能力に起因する部分が影響する。 その為、それぞれの生徒のレベルに合った教材と指導により、生徒個々の状況によりその指導に時間がかかる場合がある可能性も否定できない。生徒に学習した、身に付いた学習成果を感じさせながら継続した指導を進めることとする。 観点別評価の③の『主体的に学習に取り組む態度』の評価は“粘り強い学習”への取り組み”と “生徒自身が自ら、学習の調整を行う”しつかり学習し、それが成果に結びついたか』の評価がされる為、各教科・科目の指導教員が、生徒の特性に合わせた、また、本校の生徒の実態を鑑みた“評価基準”を設定し、それに基づいて評価していく事とする。 | ・『聴音・新曲視唱・コールユーン・ポング』に於いては、指導と生徒のその学習の得た状態は、生徒個々の度合いに違いはあってもその成果はみとめられた。『楽典』に於いては、理論的に組み立てて理解を積み上げていくという科目の特性があるため、生徒は反復学習によって楽典の知識は増えているものの、それを応用して次にすすむ思考力・判断力が必要とされる領域では、『基礎学力(特に、数学的思考)がどれほど定着しているのか』の起因する状況が指導する例にあり、普通教科(数学)との関連性も考慮し、更なる工夫をした指導が検討する必要もある。 来年度は1年生、2年生が新カリキュラムによる学習、今年度は、今年度の諸指導方針、指導内容、その学習効果等をPDCAによって、生徒の学習状況、指導内容のレベル・指導方法を調整して、段階を追って観点別評価により、“新しい学力観”による評定へと結び付けられることを目標とする。 |
| | ○普通科目の基礎学力の定着と充実 ①国語、数学、英語の基礎学力の定着と充実とは、教育課程全般の履修・修得の不可欠なものであり、指導要領が新しく今、それらの教科の指導に於いて再度検討が必要である。 ②生徒達にとって、いかに興味を持たせ、分かり易く、理解しやすく、教科で習得した内容を運用できるようにするか～新指導要領の目標を鑑み、授業の工夫が必要。 | 基礎学力(英語・数学・国語)の定着が十分でないケースが見受けられる。新学習指導要領(中学校)では、旧学習指導内容と比較して、3年間での学習、習得すべき学習内容に幅と深さが増え、より充実した学び』がいろいろな角度から、各教科の特性を踏まえるようになっていく工夫されている。しかし、その結果、場合によっては、生徒に過重負担を与えてしまう可能性がある。特に、学力差が生じやすい主要3教科に於いては、顕著に表れる可能性があり、その対策は必要不可欠である。音楽科受験生は、中学校での学習に加えて、音楽科受験の為に、専攻実技の試験が課せられるので、その準備に相当の時間が費やされる。そこで、本校では、これらの教科の指導に当たっては、特に一年次では、『中学校での学習内容の復習』を取り入れたので、その内容がどの程度理解され、学力として定着しているかを確認しながら、『高等学校での学習内容を』指導していく事としている。 | 『英語・数学・国語』の基礎学力を定着させるためには、下記の4つの点に注意をしてその指導に当たることとする。 ①毎時間、その授業でのポイントを明確に生徒に提示し、それぞれのポイントを具体的に分かりやすく説明する。勿論、授業時間内で生徒との質疑応答により理解度を確認しながら授業を展開していく。その際、学力差が大きな教科である為、リズムアップのみならず、高い学力の生徒に対しては、更なる学力の向上を図るために『課題・問題の提示』にも十分配慮する必要がある。 ②適宜、各単元ごとに小テスト、課題を課し、理解度を再確認を行っていく。 ③各学期の評価に当たっては、『主体的な学習を取り組む方の把握をする為』の『課題・レポート』を適宜、必要に応じて課することとする。 | ・基礎学力の定着に関しては、『反復学習』により効果が認められた。 ①国語の『漢字』の学習の指導『漢字ワーク』の定期的な宿題とその提出。次に、その宿題の範囲の『漢字テスト』の実施。テストでは合格基準を設定し、基準以下のものには、再度同じ範囲の『漢字テスト』を課す。 ②英語では、各学期適宜、教科書以外の教材の学習、更には音楽科での専門科目・科目の学習に支障をきたしている状況がある、その内容を教員が理解し、内容の内容の理解が不十分である。 ②対応策は、各教科・科目を指導していく中で、その教科の内容を指導していく事と並行して、その教科における実際の日本語の使われ方の指導を教科の特性を生かして指導していく事が必要とされる。 ③『数学Ⅰ』は高校1,2年、4単位の履修となる為、そのなかで基礎的な分野：文字の計算、一次、二次方程式、不等式、図形の証明、統計の処理の基礎的な範囲を通して数学的思考力の養成を目標とする。 | ・新学習指導要領による、新教育課程の実施に当たっては、『国語力』の基礎の定着と充実がカリキュラムによる、教育現場での学習指導の重要な鍵の一つになっていると、日々学習指導を通して感じられる。『国語力』とは、①日本語を正確に『読む』『書く』『聞く』『話す』という4つの基本的な言語活動能力が十分習得されたこと、また、高等学校での普通教科・科目の学習、更には音楽科での専門科目・科目の学習に支障をきたしている状況がある、その内容を教員が理解し、内容の内容の理解が不十分である。 ②対応策は、各教科・科目を指導していく中で、その教科の内容を指導していく事と並行して、その教科における実際の日本語の使われ方の指導を教科の特性を生かして指導していく事が必要とされる。 ③『数学Ⅰ』は高校1,2年、4単位の履修となる為、そのなかで基礎的な分野：文字の計算、一次、二次方程式、不等式、図形の証明、統計の処理の基礎的な範囲を通して数学的思考力の養成を目標とする。 |
| | ○生徒指導に於いて、PDCAを基に年々変化する生徒の生活状況を把握しながら、それに対する方策を検討する必要がある。以下は、継続的な指導が必要な項目。 1.基本的な生活習慣の確立の指導 ・挨拶礼法 ・綺麗な言葉遣い 2.授業規律の確立 ・時間厳守 ・下校時間の徹底 ・個人所有物の管理 ・携帯端末の適正な使用方法 3.思いやりのある人格形成 | 1.基本的な生活習慣の確立 ・挨拶礼法～生徒からの自主的な習慣としてはまだ確立されておらずである。基本的な生活習慣の確立を目指し更に継続した指導を図る。 ・綺麗な言葉遣い～ホームルーム、全校集会等における指導と共に、日常的な対教員、対生徒に対して不適切な言葉遣いがあった場合は、その都度その都度指導をし、改めて正しい地道な指導の継続が基本的な生活習慣として定着させる方策として、教員全体が同一歩調で取り組んでいく事とする。 2.授業規律の確立 ・時間厳守の指導は全学年・全員の遅刻0を目標とした。 ・下校時間については、5時完全下校を出来、基本的な学校での生活習慣の確立が見られる。今後も継続して指導に取り組む。 ・個人所有物の自己管理に関して～生徒の個人所有物の『置き忘れ』『紛失』が目立つ現状がある。生徒の机の中・机上・個人ロッカーの整理整頓が出来ていない状況が大きな現認を見受けられる。 ・本校での携帯電話の指導： 規律ある携帯電話の使用の指導をH Rや全体集会で指導しているものの、完全には徹底できていない。また、メール、ライン等の不適切な使用による生徒間のトラブルは減少しているが、継続的な指導は必要である。 | ・1『下校時間の徹底』は昨年度からの指導課題でもあり、ほぼ徹底されてきた。これは、継続した指導により規律ある習慣の確立が図られた。下校時間の厳守・徹底は生徒の安全・安心を確保するために、必要不可欠な課題であった。 2 個人所有物の自己管理の徹底を図るために、毎日放課後の校内巡視の際、H Rの生徒の机上の整理整頓の状態をチェックすることになった。 3 今年度、生徒の安全、保護者の安心を学校として確立する為に、川越警察生活安全課の協力により『防犯講話』『薬物乱用防止教室』を計画し生徒への注意喚起を促していることを計画した。 | ・1『下校時間の徹底』生徒指導主任、担任、日直教員との連携で毎日継続して下校指導をした結果ほぼ徹底された。ただ、本校は音楽科であり、実技レッスン時と下校時間が被った場合は現場でもあり指導の難しさもあった。 2『個人所有物の自己管理』担任が毎日指導と連携させて指導した結果として、改善が徐々に認められた。しかし、教室内の整理整頓においては、生徒個人の認識に温度差があり中々改善に苦慮していた。 3川越警察・生活安全課の金子氏氏による、『防犯講話』『薬物乱用防止教室』での具体例を挙げた講話は、登下校時の安全確保、又、薬物の危険性に対処して、生徒達に注意喚起させた。川越警察・生活安全課による講話は今後も継続していくこととする。 | ・1『時間厳守』これからの実社会におけるキャリア教育の根幹となる部分で、『基本的な生活習慣の確立の最重要課題』の一つとなり、継続して根気よく指導していくことが不可欠である。 2『教室内の整理整頓』クラスの『学習環境』に影響が大きく、来年度も継続指導の必要性が認められる。 3『携帯電話の指導』『携帯電話安全教室』の開催を計画。SNSの使い方が日々変化している現状の中で、生徒間の誹謗・中傷の原因となる可能性が大きく、生徒の安全・安心な学校生活を確保するため、更なる細部に渡る指導の必要性がある。 |
| | ○高大連携接続という7年間の音楽を核とした一貫教育システムの実施により、音楽芸術の探究を目指す。附属高校生に系列大学の『具体的な教育内容とその目的』『大学卒業後のキャリア支援の方策と現状』を入試広報センターとの連携を促進していく。 | 高大連携接続(音楽を通して7年間一貫教育)の教育指導計画とその具体例を、今年度は『附属高校生とその保護者(1～3年)』に焦点を合わせたプログラム』を広報・試センターが大学と高校で内容、企画の開催時期を協議し、『本学園における音楽を軸とした高大連携接続教育の実際』を附属高校生と保護者に提示することとした。 | ・『本学園における音楽を軸とした高大連携接続教育の実際(附属高校生とその保護者(1～3年)を対象とした大学紹介の企画)は、“スペシャルオープンキャンパス”という名称で、5月23日(日)に開催することになった。 内容は、①大学の各専攻の紹介、②ウィリアムズ・アカデミーの短期留学研修の具体的な説明、③レクチャーコンサート、④キャリア支援センターより(キャリア支援教育と卒業生の具体的な就職状況)とする。 | ・“スペシャルオープンキャンパス”5月8日(日)開催 ①3学年の生徒、保護者の参加は勿論、1、2年生の生徒、保護者の参加も多く、高校卒業した後の進路、更に、大学卒業後のキャリアとの結びつきも具体的に卒業生から直接話を聞ける場面もあった。 ②附属高校生には大学進学の際の専攻の検討と大学卒業後の進路を幅広い視点で考えることができる良い機会となった。 ③これに於ける、各専攻での具体的な教育内容を実際に大学教員から指導をうけることによって、その内容・目的を深く理解できたのは勿論、進路選択にとても効果的であった。 ④保護者にとって、音大卒業後、学生がどのように社会と関わっていく可能性があるか、キャリアの具体的な説明は説得力があった。 | ・今までの『大学紹介』『体験実習』が大学・入試広報センターより一方的に生徒、保護者に提供する傾向があった。今回の“スペシャルオープンキャンパス”(5月8日(日)開催)では、事前にその内容の明確な目的、具体的な内容の詳細、キャリア教育についての現状の説明など、生徒、保護者の目標を組み立てられていた内容であったが、昨年度より、附属高校生とその保護者にとっては生徒の将来を考える良い機会となった。講座によっては、各専攻の現役の学生から、それぞれの専攻の内容と学生の感想の話も聞くこともでき、将来のキャリアとの結び付けを検討しつつの生徒本人にとってよりよい進路決定が可能となった。 |

| 学校関係者 評価 |
|--|
| 学校関係者からの意見・要望・評価等 |
| ○高い評価を受けている項目 1 学校経営全般：学校は、大学での教育を視野に入れながら、音楽芸術探究を目標とした、一貫教育の推進に取り組んでいる。実際に取り組んでいる。同時に、教育方針に基づいたOne to Oneの教育を実施している。 2 教育課程全般：カリキュラムは音楽専門教科・科目と普通科目がバランス良く習得できるようにになっている。また、実技指導に於いては、計画的に、個々の特性・能力に応じたきめ細かい指導が実施されている。更に、クラスコンサート、東邦第二コンサートでは、技能のみならず、一人ひとりの興味・関心に応じ、主体的な取り組みができ、自主的な学びの機会が得られる。 3 生徒指導全般：学校は生徒理解に努め、適宜、適切に教育相談を行っている。 ○学校として次年度に向けた対応策 1 学習指導面に於いては、全ての学習(音楽教科・普通教科の学習)の基礎となる『基礎学力』の更なる定着と充実を図ることに努める。 2 生徒指導面では、学校生活において不可欠な『基本的な生活習慣の確立』の指導の徹底を目標とする。 ○改善要望項目 1 学校は、更なる学校規律の確立に努め、より適切な生徒指導を実施して欲しい。 2 定期試験(中間試験・期末試験)は準備期間を考慮して年間行事予定に組み入れて欲しい。 |